

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 30 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330228

研究課題名(和文) 子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動 活動理論にもとづく研究開発

研究課題名(英文) Child-driven collaborative learning activity that promotes community and social development: Activity-theoretical research and development

研究代表者

山住 勝広 (Yamazumi, Katsuhiro)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50243283

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、第1に、人々の社会的実践を協働の「活動システム」ととらえる「活動理論」の枠組みを応用しながら、子どもたちと学校内外のパートナーが協働・交流して新たな地域文化の創造へ参加し、地域社会をよりよい方向に変えていくような学習活動を理論的に概念化することを試みた。第2に、大阪府吹田市と京都府八幡市の2地域における学校での総合的な学習の時間、放課後教育活動やコミュニティ学習を対象にした実践開発に取り組み、国内外における同等の活動との比較研究を進めた。以上の理論的側面と経験的側面を総合し、成果として、「子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動」の具体的な実践モデルの構築と提起を行った。

研究成果の概要(英文)：This research primarily draws on cultural-historical activity theory, in order to conceptualize child-driven collaborative learning activities in which children and various in- and out-of-school partners collaboratively promote development of a new culture of communities, and improve their society. Additionally, this research extends to include the development of practices for a school curriculum unit in the Period for Integrated Study, an after-school educational activity in the city of Suita in Osaka Prefecture, and a community-based learning activity in the city of Yawata in Kyoto Prefecture. Further, this research conducted comparative studies examining similar educational practices in domestic and overseas sites. By integrating findings from these theoretical and empirical analyses, this research proposes a concrete and practical model of child-driven collaborative learning activity for building a better future community.

研究分野：教育方法学

キーワード：教育方法 協働学習 地域創造 活動理論 国際比較 総合的な学習の時間 放課後教育 ネットワーキング(結び目づくり)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、学校やさまざまな教育機関の役割を、依然として、あらかじめ定められた特殊な知識・技能の伝達と受容に限定するような教育と学習に対する狭い概念化を乗り越えていくために、近年の国内・国外での最新の研究動向を学術的背景にして、旧来の「文化を受容する教育/学習」から新たな「文化を創造する教育/学習」への転換を図り、教えることと学ぶことのあり方を根本的に見直し、子どもたちの学習を拡張する新たな形態を探っていこうとしたものである。

そのさい、本研究では、子どもたちが創造的な活動の能動的な探究者となっていくような学習過程を「文化・歴史的活動理論(cultural-historical activity theory: 以下、活動理論という)」にもとづき実践的に探究することとした。「活動理論」は、現実世界の対象と相互作用する「活動」を通して人々が社会生活を組織化し、その中で自らの知識や技能、意識や人格を発達させていくことに注目し、人々の社会的実践を協働の「活動システム(activity system)」としてとらえる理論的な枠組みである。また、それは、そのような活動を転換し、創造していく人々の主体的な能力を拡張するためのアイデアやツールを明らかにしようとするものである。つまり、本研究は、このような活動理論を応用した教育研究を推進することによって、子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動の開発に取り組み、教育実践の革新的なアイデアや概念、具体的なモデルを生み出そうという背景をもつものだった。

### 2. 研究の目的

本研究は、(1) 子どもたちと学校内外のパートナーが協働・交流して新たな地域文化の創造へ参加し、地域社会をよりよい方向に変えていくような学習活動を理論的に概念化した上で、(2) その具体的な実践モデルを明らかにしようとしたものである。

そのため、本研究では、人々の社会的実践を協働の「活動システム」としてとらえる「活動理論」の枠組みを応用しながら、大阪府吹田市と京都府八幡市の2地域における学校での総合的な学習の時間、放課後教育活動やコミュニティ学習の実践開発を推進するとともに、国内・国外における同等の活動との比較研究を行うこととした。そこから、「子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動」の具体的な実践モデルを構築し、提起することを本研究の目的とした。

### 3. 研究の方法

まず、本研究では、研究の全体的な基盤となる理論研究を、活動理論にもとづき進めた。そのさい、「社会的に孤立した学校」「教科書の知識の伝達や正しい答えの獲得に閉ざ

された形式的な学習」などを特徴とする、伝統的な学校における学習の狭い概念化の限界を超え、それを拡張していくような子どもや若者の新たな学習の形態に焦点化した。ここでは、国内・国外の最新の研究動向に関する文献レビューを行いながら、本研究の理論的仮説を構築していった。

現在、活動理論は、単独の活動システム(たとえば、学校)への限定を超え、組織・制度・文化・国などの境界を打ち破るような、異なる多様な活動システム(たとえば、学校と学校外のコミュニティや組織)の間のネットワークを分析し新たにデザインする、新しい世代へ向かって発展してきている。本研究の理論的側面では、こうした活動理論の拡張的な枠組みにもとづき、子どもたちの学習の新たな形態として、現実社会の多様なパートナーと協働・交流する「地域創造のための学習活動」を概念化していった。それは、「教師が教え統制し、子どもが教えられ統制される」というような旧来の教育方法に固定的な役割分業を超え、「文化を創造する教育/学習」の概念を新たに展開するものとなった。また、ここでは、そうした異なる多様な個人やコミュニティの協働・交流の中で、子どもや若者が、創造的な活動や新しいコミュニケーションの形態に積極的に参加し、自らの未来を自らの力で形成する主導的な担い手として発達してゆくような学習とは何かについて考察していった。さらに、そこから、文化的多様性の中で共生し、持続可能な社会を築いていくために求められる、教科横断的で総合的な21世紀型の能力について、明らかにしていくことを行った。

第2に、本研究の実証的側面として、吹田市と八幡市の2地域において、総合的な学習の時間、放課後教育活動やコミュニティ学習など、子どもを中心とした地域創造のための具体的な教育実践のモデル開発およびデータの収集と分析を進めていった。そこでは、詳細なデータを収集して、文字起こしの上、選択・整理し、焦点となるデータを確定した。それを本研究における理論的な仮説や概念と相互作用させながら緻密に分析し、子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動の生成に関し、鍵となる重要なアイデアと具体的な実践モデルを明らかにしていくことを行った。

さらに第3に、活動理論を共通の枠組みとして、国内・国外における同等の活動との比較研究を展開した。こうした比較研究の側面では、(1) カリフォルニア大学サンディエゴ校比較人間認知実験室において実施されている放課後教育活動「第5次元(5th Dimension)」プロジェクト、(2) カリフォルニア大学「大学・コミュニティ間連携(University Community Links)」プロジェクト、(3) アメリカにおける「エディブルスクールヤード(Edible Schoolyard)」プロジェクト、(4) フィンランドにおける「フューチャースクール

(future school)」プロジェクト、(5) カリフォルニア大学ロサンゼルス校附属実験小学校における「探究学習(inquiry-based learning)」、(6) 岐阜県岐阜市立長良小学校の「仲間とともに学び合う授業」、(7) 神戸市立地域人材支援センターの「震災体験学習プログラム」、(8) 大震災の被災地における「震災学習」の取り組みの研究調査を進め、それぞれの比較研究を試みた。

最終的に3年間の研究成果を全体的にまとめていき、理論的研究と実証的研究を高度に結合して、吹田市と京都府八幡市の2地域における実践開発の成果、および国内・国外における同等の活動との比較研究の成果にもとづきながら、子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動の具体的な実践モデルを構築していくこととした。

#### 4. 研究成果

本研究では、成果として、学校での総合的な学習の時間、学校外での放課後教育活動やコミュニティ学習など、地域において展開される協働学習活動を、子どもや若者が主導する地域研究、あるいは子どもや若者が自分たちで行う地域創造活動の実践として新たに概念化し、「ノットワーキング(knotworking: 結び目づくり)」を通したハイブリッドな「拡張的学習(expansive learning)」の活動としてモデル化することが達成された。

「ノットワーキング」は、活動理論の発展を過去30年ほどにわたり主導しつづけ、今日、世界的に最も代表的な活動理論家である、フィンランド、ヘルシンキ大学活動・発達・学習研究センター(Center for Research on Activity, Development and Learning: CRADLE)のセンター長・教授のユーリア・エンゲストローム(Yrjö Engeström)によって提起された概念である。それは、流動的で分散した協働組織のパターンに注目するものである。つまり、「ノットワーキング」とは、行為者や活動システムが、弱くしか結びついていないにもかかわらず、急遽、即興的に響き合い、協働の行為を脈打たせ、互いの間に結び目を結び、ほどこき、また結ぶといった律動を繰り返していくようなつながりの創発のことである。

本研究では、「ニューズール」と名づけたプロジェクトにおいて、具体的な実践開発と実証研究を進め、子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動の実践モデルを構築していくことに取り組んだ。このプロジェクトは、吹田市立の小学校と提携して、放課後教育活動や総合的な学習の中で、地域における幻の伝統野菜「吹田くわい」の再生をテーマに、学校現場、大学、地域に根ざす有機栽培・自然農法を基盤にした伝統野菜生産農家、さまざまな専門家、市民レベルでの草の根のボランティア活動、教育委員会、行政機関などが協力して、子どもたちが地域の人々とともに拡張的な学習活動を創り出してい

くことに焦点化したものだった。また、八幡市のプロジェクトでは、市内にあるすべての小学校・中学校・高校から選ばれて集まる児童・生徒による「八幡子ども会議」を対象に、子どもたちが地域でさまざまな地域住民と協力してフィールド調査を行い、問題を発見し、調査結果や地域改善のための提言をまとめたスライドやビデオ作品を制作、年度末に市長に対しまちづくりの新たなアイデアを提言するという、子どもと地域住民(地元企業、地域のボランティア団体、行政機関などを含む)との学び合いと協働・交流のコミュニティ学習の実践開発を進めてきた。

こうした「ハイブリッドな協働学習活動」としてモデル化できる教育実践の創造では、学校と学校外の境界領域でのさまざまな活動システムの相互作用や混交を通して、子ども、教師、学校外の多様な参加者の間に協働の学習が生まれていく。そのような学習は、エンゲストロームが提起する「拡張的学習」の理論にもとづいてとらえるならば、「社会的に孤立した学校」における「教科書の知識や正しい答えの獲得に閉ざされた形式的な学習」を特徴とする、伝統的な学習の制度的境界を拡張し、外部への志向性のもと、学校での学習を学校外の世界と結びつけていこうとするものであるといえる。つまり、本研究がモデル化してきた「ハイブリッドな協働学習活動」は、ヒエラルキーにもとづき、トップダウンに統制され与えられたカリキュラムと教科書をたんに受容するような学習の制度的境界を超え、学校外のコミュニティや組織、生産的な実践、多様な情報源に向けて学習対象を拡張し、現実の社会や生活の複雑な文脈の中で問題を発見・創造するようなネットワーク型の学習を創り出すのである。

本研究の中で推進した、このような拡張的学習のネットワークに関する具体的な実践開発では、教師と子どもたち、そして学校外でのさまざまな個人や組織の間に、必ずしも固定的で安定的な強い結びつきが築かれているわけではない。にもかかわらず、これら多様なパートナーは、活動の対象を部分的に共有し、互いの活動を柔軟かつ即興的に協調させることによって、協働の活動を創り出していることとらえることができる。つまり、ここでは、異なる個人や組織が緩やかにつながり、特定の個人や固定した組織がコントロールの中心になるわけではなく、活動の主導権を刻々変化させながら行う協働の行為、すなわちノットワーキングと喩えることのできる、複数の活動システムの柔軟な相互連結や組織間協働のパターンが創発するのである。

また、ノットワーキングの中の拡張的学習では、学校外のコミュニティや組織、参加者が、いわば「学びの提供者」となって、代わる代わる活動のイニシアティブを発揮することが生じている。ノットワーキングは、教室内外で、学びの潜在的に多様な資源を結び

つけ互いにやり取りさせることによって、「教室外の学びの提供者」という新たな「道具」を活動システムにもたらしものになるといえよう。こうした資源は、「知識のファンダ」と呼ぶことのできるものである。

本研究は、こうして、理論的側面と経験的側面を総合するかたちで、子どもたちと学校内外の多様なパートナー（大学、生産者や専門家、企業、ボランティア組織、行政機関など）が協働・交流して、新たな地域文化の創造に取り組んだり、ともに地域社会のよりよい変化にかかわったりしていく学習活動のデザインと実践のモデルを提起するものとなった。

以上のような研究成果は、外部のコミュニティや組織と結び合い、つながって、社会的な取り組みと連携するような拡張的学習を生み出すあり方へと学校のパラダイムを転換していくという点で、国内・国外の教育学研究に対し、大きな意義と重要なインパクトを有するものである。

また、本研究が成果として明らかにした、ネットワークを通じた子ども主導の拡張的学習の実践モデルは、学校における学習のイノベーションを今後、普遍的に探っていく上で、きわめて有望なものである。本研究の成果に立脚するならば、学校は、地域で取り込まれている持続可能な未来を創るためのアクティビズム（積極的行動主義）と連携するネットワークによって、子どもたちが周りの社会や自分たちの生活と能動的にかかわっていく「足場」となることができるといえる。学校がネットワークによって創り出すこうした「足場」こそ、子どもたちがさまざまな他者や外の社会と多様につながり、それに共感し連帯することを通して、自分たちの生活や未来を協働で創造していくための学習に必要となる空間や手立てや時間をもたらすのだと、本研究の成果から展望することができるのである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

伊藤大輔、稲葉光行、複合的媒介人工物としてのビデオ作品がもつ意味：平成 26 年度八幡子ども会議委員による市長提言を事例として、日本教育工学会研究報告集、査読無、JSET15-1、2015、195-200

山住勝広、拡張的学習とネットワークする主体の形成 活動理論の新しい挑戦、組織学会「組織科学」、査読有、第 48 巻第 2 号、2014、50-60

DOI: 10.11207/soshikikagaku.48.2\_50

伊藤大輔、稲葉光行、子どもを中心とした地域創造のための協働学習 平成 25 年度八幡子ども会議の事例を中心に、日本教育工学会研究報告集、査読無、JSET14-1、2014、

277-284

山住勝広、語りえぬ記憶と復興への学習 ひとつの大震災の間で、日本教育学会「教育学研究」、査読有、第 79 巻第 4 号、2012、367-379

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009578477>

山住勝広、活動理論と教育的介入の方法論 学校における教師の拡張的学習を事例にして、関西大学「文学論集」、査読無、第 62 巻第 3 号、2012、21-37

<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/7561>

山住勝広、喜びとしての道德教育 スピノザ、ヴィゴツキー、野村芳兵衛、関西大学初等教育学会「学校教育学論集」、査読無、第 3 号、2012、57-62

蓮見二郎、社会形成としてのシティズンシップ教育、法政研究、査読無、第 79 巻第 3 号、2012、892-914

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/25979/p706.pdf>

Hasumi, Jiro, Contradiction and citizenship education at a university, *Proceedings of London International Conference on Education*, 査読有、2012、432-433

〔学会発表〕（計 15 件）

Inaba, Mitsuyuki, Children-centered learning community and collaborative activity for regional development, *University-Community Links (UC Links) Conference 2015*, March 6, 2015, University of California, Berkeley, USA

伊藤大輔、稲葉光行、複合的媒介人工物としてのビデオ作品がもつ意味：平成 26 年度八幡子ども会議委員による市長提言を事例として、日本教育工学会研究会「学習支援環境とデータ分析ノ一般」、2015 年 2 月 28 日、九州大学（福岡県・福岡市）

山住勝広、山住勝利、ゼロからの震災学習と記憶のフラット化 活動理論にもとづく形式的介入研究、関西教育学会第 66 回大会、2014 年 11 月 16 日、滋賀大学（滋賀県・大津市）

Inaba, Mitsuyuki, Children-centered learning community and collaborative activity for social improvement, *The 2nd International Conference on Lifelong Learning for All 2014 (LLL 2014)*, September 11, 2014, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

山住勝広、拡張的学習と変革型主体の形成、活動理論学会第 3 回研究大会、2014 年 7 月 19 日、関西大学千里山キャンパス（大阪府・吹田市）

伊藤大輔、稲葉光行、子どもを中心とした地域創造のための協働学習 平成 25 年度八幡子ども会議の事例を中心に、日本教育工学会研究会「教師教育と授業研究ノ一般」、2014 年 3 月 1 日、愛知工業大学（愛知県・豊田市）

Yamazumi, Katsuhiro, Learning through

knotworking: An activity-theoretical study of pedagogical practices concerning the two great earthquakes in Postwar Japan, *The 29th Colloquium of the European Group for Organizational Studies*, July 5, 2013, University of Montréal, Montréal, Canada

Yamazumi, Katsuhiro, Teachers as collaborative boundary crossers: An activity-theoretical study of school innovation, *The 6th Nordic Conference of the International Society for Cultural and Activity Research*, June 13, 2013, Kristianstad University, Kristianstad, Sweden

Yamazumi, Katsuhiro, Fostering the agency and creativity of children: An activity-theoretical approach to educational change in Japan, *The 2012 joint International Conference of the Australian Association for Research in Education (AARE) and the Asia Pacific Educational Research Association (APERA)*, December 4, 2012, University of Sydney, Sydney, Australia

Hasumi, Jiro, Contradiction and citizenship education at a university, *London International Conference on Education*, November 20, 2012, London, UK

山住勝広、活動理論と教育的介入の方法論、日本教育学会第71回大会、2012年8月24日、名古屋大学（愛知県・名古屋市）

山住勝広、子どもを中心とした地域創造のための協働学習活動 活動理論にもとづく研究開発、日本教育学会第71回大会、2012年8月25日、名古屋大学（愛知県・名古屋市）

山住勝広、授業研究における教師の拡張的学習の生成と展開 校内研修会を超えて、活動理論学会第2回研究大会、2012年8月18日、立命館大学朱雀キャンパス（京都府・京都市）

蓮見二郎、大学におけるシティズンシップ教育の活動理論的分析、活動理論学会第2回研究大会、2012年8月18日、立命館大学朱雀キャンパス（京都府・京都市）

山住勝広、喜びとしての道徳教育 スピノザ、ヴィゴツキー、野村芳兵衛、世界新教育学会第82回国際教育フォーラム、2012年6月2日、自由学園（東京都・東久留米市）

〔図書〕(計2件)

Yamazumi, Katsuhiro, Quality assurance in teacher education: Implications for promoting student learning. In C. Ng, B. Fox, & M. Nakano (Eds.), *Reforming learning and teaching in Asia-Pacific universities*. Dordrecht: Springer, 2015, in press

Yamazumi, Katsuhiro, Beyond traditional school learning: Fostering agency and collective creativity in hybrid educational activities. In A. Sannino, & V. Ellis (Eds.), *Learning and collective creativity: Activity-theoretical and sociocultural studies* (pp. 61-76). New York: Routledge, 2013, 273

〔その他〕

山住勝広による European Group for Organizational Studies (EGOS) 年次大会での本研究課題に関する研究発表（学会発表の）が、“That’s Interesting” Award 2013 を受賞した。

[http://www.egosnet.org/egos/about\\_egos/thats\\_interesting\\_award](http://www.egosnet.org/egos/about_egos/thats_interesting_award)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山住 勝広 (YAMAZUMI, Katsuhiro)  
関西大学・文学部・教授  
研究者番号：50243283

### (2) 研究分担者

稲葉 光行 (INABA, Mitsuyuki)  
立命館大学・政策科学部・教授  
研究者番号：80309096

伊藤 大輔 (ITO, Daisuke)  
金沢工業大学・基礎教育部・准教授  
研究者番号：40440961

蓮見 二郎 (HASUMI, Jiro)  
九州大学・法学研究院・准教授  
研究者番号：40532437